美歷だより

諫早
眼鏡橋
架橋180年
since1839

Isahaya
Museum of
Art & History
Museum News
Vol.20

CONTENTS

諫早市美術・歴史館だより

館長のつぶやき 2
BIREKI・レポート 3
収蔵資料の紹介 4
いさはやの歴史 5
美術の部屋 6
古文書の部屋 7
お知らせ

エーセルテレカラフ（電信機）

幕末に作られた現存する唯一の電信機であることから、平成２７年９月４日に国の重要文化財に指定されました。

１１月１日～３０日まで、常設展示室にて展示します。

期間限定ですので是非ご覧ください。

（詳細については、裏のお知らせをご覧ください。）

個人蔵（美術・歴史館寄託資料）

Kancho no tsubuyaki

館長のつぶやき

−Vol. 2−

５月のある夜、爽やかな一瞬の出会い（その2）

ここはJR２０時５５分長崎駅発長与経由諫早行の列車内、私は長崎の高校から自宅へ帰るところだ。背を向けて立っている男性は前に座っている大学生風の男性からさっき何か小さな物を拾ってもらったはずだが、すぐにまた何かを探している様子で足元を観ている。「何だろう、何をさがしているのだろう。」と思いつつスーツ姿の男性の目線の先、足元を観ていると彼の左斜め前に座っている女性の下ろしている両足の奥に床の上で光る丸い物を見つけた。もしかしてあれを探しているのではないだろうか。彼からは見えないのかもしれない。どうしようと思っていると間もなく次の駅に停車するというアナウンスが車内に流れた。チャンスだ。私が拾ってあげようと決心した。

停車するのを待って、膝に置いていたカバンを座席に置く。勇気を出して光る丸い物に向かって動いた。膝を列車の床につきそうなほど姿勢を低くして、彼の左わきを勢いよく移動した。女性が下ろしている足の裏側に手をまわして、列車の床からそれを拾い上げた。彼は、私が突然、左横に低い姿勢で躍り出て床に落ちている物を拾うとしたことに、少し驚いた様子だった。低い姿勢のまま右手で丸い物のピンをつまみ彼を見上げて「どうぞ」と笑顔で差し上げた。彼は少し驚いた風だったが、私を見下ろしながら笑顔で「どうもありがとう。」と言って右の手の平で受け取った。私は、立ち上がり自分の席に戻った。「喜んでもらえてよかった。」と清々しい思いと満足感に浸った。

列車は発車し、私が降りる次の駅に着いた。席を立って列車の乗降口に行こうとすると、彼はそれを待っていたかのように私の方を向き「どうもありがとうございました。」と再度笑顔で言ってくれた。私は頭を下げながら笑みを返し、列車を降りて家路を急いだ。

ココロねっこバッジ

走る列車の中、私は右手で吊革につかまっている。さっき目の前の大学生風の男性からココロねっこバッジの留めピンを拾ってもらった。だがココロねっこのロゴが入った表側はない。拾ってもらった後も足元を観たが見当たらない。もしかしたら左斜め前に座る女性の足元にあるのではと思いつつもじろじろと長時間目を向けて探すのは憚られる。「見つからないかな。」と諦めかけ、最後にもう一度と体を少しずらし足元を観るもやはり見つからない。「家にもう１個ある。仕方ない、諦めよう。」と思った。

列車は次の駅に停車した。その時だった、左後方から女子高生がかがんだ状態で私の左斜め前に突然現れた。勢いのある唐突な動きに私は少し驚いた。彼女は、そのままの姿勢で女性の足の裏側の床に手をやった。何かを拾いに来た様子だった。私は、彼女がボールペンか何か自分の持ち物を落とし、それがここまで転がったのを拾いに来たのかと思い、拾いやすいようにと少し体をずらした。彼女を見下ろしていると拾った物を右手でつまみ、かがんだまま笑顔を見せながら私に「どうぞ。」と差し上げてきた。私はその勢いに押されながら、吊革から右手を離し手のひらで受け取った。ココロねっこのロゴが入ったバッジの表側だった。「どうもありがとう。」と笑顔でお礼を言った。彼女は、立ち上がり自分の座席に戻って行った。

列車は動き出した。「彼女はどこで降りるのだろう。降りるときにもう一度お礼を言いたい。」と考えながら、心が温まるのを感じた。次の駅で列車が止まると彼女も私の側を通って乗降口に向かうところだった。「どうもありがとうございました。」と声をかけると、こちらを振り向き笑顔を残して降りて行った。きっと、今から家路につくのだろう。気をつけてと心で声をかけた。

乗客も多い中、しかも座席から離れた場所に落ちている物を拾い持ち主に渡す行為は、女子高生にとって勇気と決断が必要だったでしょう。しかも笑顔での対応。よい環境で育ってきたのだろうと思います。私にとっても素晴らしい出来事でした

（館長：堀　輝広）

BIREKI・レポート

Vol.11　美歴の夏休み！2019

今年の美歴の夏休みは、小学生の親子を対象に『自然観察と植物標本の作り方教室（全２回）』を開催しました！元長崎大学教授の陣野信孝先生をお招きし、7/27(土)は美術・歴史館近くの上山公園で植物観察、8/3(土)は美術・歴史館で植物標本の作り方を学びました。

ヤツデ（八手）の葉は、名前の通り、8つに裂けると思われがちですが、7つや9つなど奇数に裂けることが多くて、実は8つに裂けることは稀だというお話など、子どもも大人も「へぇ～」となるような植物の話を沢山聞くことが出来ました！ネムノキの葉が暗くなると閉じるという実験をするため、実際に暗いリュックの中にネムノキの葉を入れて葉が閉じるかどうか？の実験や、ハスの茎をストローのように吹いてみて空気が通るか？の実験などなど…　実際に見るだけではなく体験を通して植物の仕組を勉強しました。

今回は親子の参加の講座でしたが、沢山の方に参加していただきました！

ありがとうございました ☺

▲みなさん真剣です！

▲ヤツデの葉っぱ！大きい！！

▲ハスの茎の実験

▲植物標本の作り方教室　（8/3）

（福井遥香）

収蔵資料の紹介

VOL.2　長与焼　　寛文7－安政６（1667－1859）

　現在の西彼杵郡長与町嬉里郷字田尾にあった大村藩の磁器窯です。開窯については『大村郷村記』－寛文７（1667）年－に浅井角左衛門等４人により始められたとあります。

　浅井角左衛門は肥前捕鯨の祖ともいうべき存在の深沢義太夫のことです。武雄にうまれ、のちに波佐見の中尾に移り住み、このとき浅井姓を名乗っていました。寛文のころの長与焼は浅井角左衛門等によって始められたことから、波佐見の陶工が入って来ていたと考えられます。その後、いったん中断となりますが、『大村郷村記』には、正徳2（1712）年に波佐見の稗古場から来た太郎兵衛により再興されたことが記されています。再興に関して『大村郷村記』には「二十年前に焼いたことがある」といった内容があります。正徳2年から20年前というと1692年の元禄5年となります。寛文期の窯はこのころ閉窯したようです。それを裏付けるように、元禄11年には現川では長与の焼物土を分けてもらっていますが、長与焼がこの時期に焼成していたとしたら他領へ焼物土をやるといったことはなかったはずです。再興した正徳期の長与焼は白磁染付主体で、茶碗や皿、徳利といった一般の日用品を焼いていました。

　そうしたなか、長与焼を一躍有名にしたのが長与三彩で、同じ『郷村記』－寛政４（1792）年－に長与村の市次郎が珍敷物を焼いたとあり、これが三彩をさすものと考えられます。三彩焼成はそれまでになかった釉薬の使い方、グラデュエーション、鮮やかな色調で、三彩をして長与焼たらしめた極めて個性的なものです。三彩は奈良時代の唐三彩が広く知られていますが、長与三彩は磁器三彩のため発色がより鮮やかで、黄・緑・紫・藍などの釉薬を施釉しています。製品には漆を施したものもあり、漆に金箔をくわえた華麗なものもあります。さらに長与焼には色漆で彩色する技法もあります。そうした長与焼も文政3（1820）年には値段が下がり利潤が少ないといったことで再度、窯を閉じます。

　弘化2（1845）年になると地元の渡辺作兵衛が再再度窯を興します。作兵衛は長崎の亀山に一時期いたといわれ、製品には亀山焼や鵬ヶ崎焼にならったものがあります。

　長与焼は寛文・正徳・弘化の各時代に開窯と閉窯を経てきた焼物です。

三彩筒形花生
口径**10.6**　高台径**10.8**　高さ**24.5**

（川内知子）

いさはやの歴史　―天保9年巡見上使史料　その3―

御右長野村　高六百七十五石四斗
外に、新田高二百四十六石七斗五升四合
御右川床村　高三百十二石七斗九升一合
外に、新田高百十六石二斗四升
御右鷲崎村　高百九十四石九斗一升七合
外に、新田高七十六石一斗七升九合
御左小川村　高二百四十三石九斗九升五合
外に、新田高九十四石六升四合
御左右船越村　高五百四十一石二斗六升五合
外に、新田高百五十六石七升六合
御左右諫早村　高六百七十三石九斗七升
外に、新田高百六十八石七斗九升三合
御泊
一　諫早　諫早より湯江迄道法三里
御左福田村　高五百六十二石二升六合
外に、新田高二百三十一石七斗六升二合
御左中山村　高三十二石七斗一升六合
御左右小豆崎村　高百六十五石八升八合
外に、新田高六十石一斗五升

御左西長田村　高三百九十五石三斗三升二合
外に、新田高百六十五石二斗三升一合
御左右東長田村　高四百十石七斗七升
外に、新田高百四十二石一斗五合
付紙に
高百十一石一斗三升　**白濱村**
内、新田三十石一斗五合
御左右深海村　高百九十七石五斗八升九合
外に、新田高七十一石八斗九升
此所に、大田尾村名、石高これ無きに付き、尋ね込み置き候事
付紙に
高六石三斗四升一合　**大田尾村**
内、新田これ無き候
御右藤田尾村　高五石九斗一升七合
御左右小江村　高七百七十六石二斗二合
外に、新田高二十九石五升六合
御左右犬木村　高二百四十一石五斗四升八合
外に、新田高七十九石七斗一升
御左右湯江村　高八百五十二石八斗八升六合
外に、新田高二百七十四石三斗六升八合
※ゴシックは朱書き（以下次号）

（大島大輔）

Vol.8

美術の部屋

令和２年１月４日から開催する「書・日本画（中村馨コレクション）」では、故中村馨氏が収集した、およそ４０点にも及ぶ、幕末から昭和にかけて活躍した諫早・長崎の画家の作品を展示します。郷土の作家が生み出した数々の作品をご堪能ください。

木下逸雲≪白菜≫

（中村馨コレクション）

鉄翁≪竹≫

（中村馨コレクション）

木下逸雲　寛政12-慶応2（1800-1866）

兄の従賢をつぎ乙名となるが家督は従賢の子に譲り医を本業にする。画は石崎融恵に学び、のち中国人の江稼圃に入門。長崎派南画家の第一人者として山水画を得意とした。画以外にも雅楽や篆刻などをよくした。

鉄翁　寛政3-明治4（1791-1871）

長崎春徳寺14世住職。崎陽の三筆（三浦梧門、木下逸雲）とうたわれ、南画を牽引した一人。長崎へ来泊していた江稼圃との出会いが鉄翁の画の転機となった。その作風は諫早の作家八十島叉橋や樋口景堂が引き継ぐことになった。

（松本恵美）

古文書の部屋

偽文書（ぎもんじょ）という古文書

古文書には真実を偽って作成される文書として「偽文書」が存在します。特に、中世社会では土地を巡る争いが頻発していた状況もあり、文書による手続きが発達していく中で、偽文書も多く作成・活用されていくことになります。
今回は、偽文書の作成された経緯や活用されてきた一例をご紹介します。

◎ 偽文書とは

権威者に仮託して作成した、事実でない内容の文書。また、有名人の名を用いてねつ造した文書。いづれも自己の立場や主張を有利にする目的で作成・継承される。「謀書（ぼうしょ）」とも呼ばれる。

◎ 偽文書となりうる文書の種類

〇裁判において訴状に添える証拠文書 ― 補任状、安堵状、譲状など ―

所領の所有権や相続の争いにおいて、訴状に添えて正当性を訴える目的で作成される文書に偽書が含まれることがある。上位の権力者からのお墨付きであることを偽証したもので、裁判の際は筆跡や印判などの精査が行われた。

〇戦国大名や武家など、権威を必要とした集団が作成した家系図

天皇家や貴族といった有力者との縁戚であるなどの家系図を作成し、権力の正当化を図る目的としたもの。一族の結束を確認する目的のものも存在する。

・・・など

一方で、偽文書の中にも権威付けされたものが長く継承されていく種類のものが存在します。これらの偽文書には正当な価値があるとも言えます。

◎ 正当に価値付けられた偽文書の一例

〇職人の由緒書（ゆいしょがき）

中世の職人は「特権」と「職能」を特定の天皇から保証されていたことから、その由来を権威付けする目的で由緒書（偽文書）が作成・伝承されていく。
時代が下り、職人の技能で成り立っていた江戸時代にあっては、職人組織を支える機能を持った実効的な「本物」の文書として認識された。

職人の例 ： 鋳物師（いもじ：鉄，銅の鋳造を職能とする職人）
木地師（きじし：椀や盆など、木地のままの器物を作る職人）
香具師（やし：縁日・祭礼等人出の多い所で興行し、商売する露天商人）

（江口喬裕）

Information

お知らせ

発行日：令和元年10月

館企画展

中村馨コレクション
書・日本画

会　期
令和２年１月4日（土）
～2月2日（日）
10時～19時
※最終入場は18時30分
休館日：毎週火曜日
会　場　２階企画展示室
観覧料　無料

講演会

『日本の書と画』
日時：令和２年１月１９日（日）
10：30-12：00
場所：２階研修室
講師：徳山　光　氏　　※聴講無料

―明治・大正・昭和―
集合写真展

会　期
12月25日（水）～　1月19日（日）
10時～19時　　※最終入場は18時30分
休館日：毎週火曜日、12/29～1/3
会　場　１階ホール
観覧料　無料

常設展示室

◆期間限定◆

国指定重要文化財
「アーセルテレカラフ」
を展示します

と　き
11月１日（金）～11月30日（土）
ところ　１階　常設展示室
開館時間　10時～19時
（最終入場18時30分まで）
休館日　毎週火曜日
観覧料　高校生・大学生・一般：**200円**
団体（15人以上）160円
小学生・中学生　：**100円**
団体（15人以上）　80円
※市内在住または市内在学の小・中学生は無料
※教育を目的として、小・中・高・特別支援学校生などが利用する場合は、引率の教員を含め無料

館講座

民俗講座　『諫早湾と干拓』

と　き　**12月14日（土）**
１３時３０分～１５時
ところ　美術・歴史館　２階研修室
内　容　諫早湾での干拓についてお話します
講　師　川内知子（美術・歴史館専門員）
その他　受講料無料、事前の申し込み不要

貸館の利用について

美術・歴史館のホール、企画展示室、研修室はどなたでも利用できます。（要予約・有料※減免制度があります）
ただし、利用目的が美術（写真、漫画を含む）、華道、茶道及び歴史などに限られております。詳細は、お気軽にお尋ねください。

個人やグループでの作品発表の場、歴史等の勉強会などにご利用いただいてます。

―編集後記―

令和元年十月二十二日、即位礼正殿の儀に伴う慶祝事業の一環として、常設展示室を無料公開しました。
当日開催されていた長崎県美術展覧会も無料公開となり、たくさんの方が来館されました。
常設展示室は、年に二回の展示替えを行っています。
ホール及び企画展示室では県展が終わると、市展、創成館高等学校デザイン展、当館の企画展などが続きます。
過ごしやすい季節になりました。皆様の癒しに学びに、ぜひ、ご利用ください。
（野田さやか）

編集・発行／諫早市美術・歴史館　〒854-0014　長崎県諫早市東小路町2-33　TEL:0957-24-6611　FAX:0957-24-6633